

## 国内経済情勢

### 概観

国内需要が個人消費、設備投資などを中心に引続き拡大しているほか、輸出も回復傾向をたどっており、11月の生産・出荷は増加基調を持続した。雇用面では、有効求人倍率が上昇するなど緩やかな改善傾向が続いている。

12月の商品市況は石油化学、紙等が保合いで推移したほかは総じて続伸し、卸売物価も高値原油の入着や国内需給の堅調などを背景に引続き大幅上昇を示した。消費者物価(東京)は野菜等季節商品の反騰に加え、灯油、ガソリン等の値上りもあって前年比上昇率が高まった。

金融面では、11月の全国銀行貸出約定平均金利が前月を上回る上昇を示し、マネーサプライの伸び率は低下した。

11月の国際収支をみると、経常収支が既往最高の赤字を記録したものの、長期資本流出超の大幅縮小などから総合収支の赤字幅は前月をかなり下回った。12月の為替相場は月中かなりの円高となった。

#### 生産、出荷はともに増加

11月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)はそれぞれ+1.0%、+0.4%と前月(各+2.6%、+3.9%)に引続き増加した。この間、生産者製品在庫(速報)は+0.4%と小幅ながら3か月連続の増加となった。

\* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

11月の財別生産、出荷の特徴をみると、資本財輸送機械(自動車、バス等)の生産、出荷が前月著増の反動から減少し、生産財の生産も石油製品、化学品(エチレン、プラスチック等)の生産調整を映じて伸び悩んだが、反面、一般資本財(化学機械、事務用機械、ポンプ等)や耐久消費財(テレビ、ラジオ、時計等)は需要好調を背景に生産、出荷とも前月に続きかなりの増加となった。

一方製品在庫の面では、生産財が石油製品、非鉄を中心として4か月ぶりの減少を示したほかは、各財とも小幅の増加となった。

国内最終需要の動向をみると、11月の公共事業契約額(前年比)は+11.6%と前月(+36.6%)に比べ伸び率が低下し、12月の公共事業請負額(前年比)は-3.0%と前年水準を下回った(前月+33.8%)。

設備投資動向については、11月の機械受注額(船舶・電力を除く民需)は、前月著増した製造業からの受注が反動減を示したため-2.5%の減少となった(前月+26.4%)が、前年同月との比較では+10.3%と高水準を持続している。

消費面では、11月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は寒気到来に伴う冬物衣料の持直しを主因に+8.0%と前月(+4.6%)に比べ伸び率を高めた。12月に入ってから歳の末商戦をみると、寒気の引緩みから衣料品が不ぞえの一方、贈答品や家電製品(カラーテレビ、ステレオ

等)はまずまずの伸びを示した模様である。この間、12月の乗用車新車登録台数(前年比、速報)は-3.0%と高水準の前年をやや下回った(前月+3.5%)。

雇用情勢をみると、11月の完全失業率は2.17%とほぼ前月(2.15%)並みとなったが、有効求人倍率は製造業からの求人増を映じて0.79倍と引続き改善した(前月0.75倍)。

#### 卸売物価の騰勢続く

12月の商品市況をみると、石油化学(塩ビ、高圧ポリエチレン)、紙が前月に続き保合いで推移したものの、海外高や国内需給の堅調を背景に非鉄、合繊、条鋼類が騰勢を持続し、前月まで軟調を続けてきた石油製品(ガソリン、C重油)、製材、合板も反発したため、全般としては続伸商状となった。

一方卸売物価は、11月に+1.5%の上昇を示したあと、12月に入ってから上旬+0.4%、中旬+0.7%と引続き大幅に上昇した(中旬の卸売物価指数は前年同月比+17.4%)。品目別には、高値原油の入着などから輸入品が騰勢を強めたうえ、国内品も原料価格の上昇や国内需給の堅調を背景として石油製品、製材・木製品などを中心に上昇した。

12月の消費者物価(東京、速報)は、台風・長雨の影響が尾を引き野菜等の季節商品が反騰したほか、灯油、ガソリン等の値上りもあって+0.5%とかなりの上昇を示し、前年比上昇率は+5.5%と前月(+5.1%)を上回った。

#### 貸出金利は一段と上昇

12月の金融市場をみると、銀行券は38,895億円の発行超(前年同38,365億円)となり、月中の平均発行残高(前年比)は+9.5%となった(前月+10.9

%)。一方財政資金については、一般財政の払超幅が前年を上回ったものの、国債発行額が前年比増加をみたうえ、外為会計も揚超となったため、654億円の揚超(前年1,068億円の払超)となった。このため、月中の資金不足額は40,934億円(前年同37,625億円)と既往最高を記録し、金融市場は通月繁忙裡に推移した。

こうした状況下、コール・レート(無条件物、中心レート)はほぼ一貫して上昇し、一時8.375%に達したが、その後銀行券の大幅還流を映じて若干低下し、8.1875%で越年した(月中+0.4375%)。また手形売買レート(2山越)も農林系統機関等の買控えもあって上・中旬にかけて上昇したあと、年明け後の資金余剰期入りを控え小幅低下を示し、8.375%で越年した(月中+0.0625~0.125%)。

11月の全国銀行貸出約定平均金利は標準金利の引上げもあって+0.163%と前月(+0.131%)を上回る上昇を示した。この間、11月のマネーサプライの伸び率(M<sub>2</sub>+CD平残、前年比)は+11.1%と前月(+11.4%)比低下した。

12月の公社債市況をみると、上旬中は機関投資家筋が買い意欲を強めたことから上伸したが、その後は薄商内のうちに小幅軟化を示した。一方、株式市況は中旬ごろまで一高一低を続けたあと、月末にかけて物色人気の高まりから大幅に上伸した(東証指数、月末459.61、月中+9.31)。

#### 為替相場は円高化

11月の国際収支をみると、原油を中心とする輸入の増すうから貿易収支(季節調整後)の赤字幅が拡大し(686百万ドルの赤字、前月同460百万ドル)、経常収支(同)は既往最高の赤字を記録した(1,688百万ドルの赤字、前月同1,226百万ドル)。この間、長期資本収支は対日証券投資の流入など

から流出超が大幅に縮小し、総合収支は1,556百万ドルの赤字と前月(同3,471百万ドル)をかなり下回る赤字となった。

11月の輸出(通関、ドルベース)は、+1.8%と前月減少(台風による船積み遅延の影響などから-3.9%)のあと再び増加し、数量ベースの前年比伸び率は+4.4%となった(前月+6.6%)。品目別(ドルベース)には、船舶、二輪自動車が減少したものの、鉄鋼、自動車、テレビ等は米国、中近東向けを中心に増加した。

一方、輸入(通関、ドルベース)は価格上昇を主

因に+4.6%と増勢を続けたが、数量ベースの前年比伸び率は一段と鈍化した(+6.8%、前月+9.3%)。品目別(ドルベース)には、鉄鉱石、食料品が減少した反面、原油は前月入着予定の一部が台風の影響で当月にズレ込んだこともあって著増し、綿花、鉄鋼くず等もかなりの増加を示した。

12月のインターバンク米ドル直物相場は、上旬末にかけて大幅円高となったあと、一高一低の動きを示し、結局月中では9円60銭の円高となった(月末239円90銭)。

(昭和55年1月11日)